

身体のあらゆる機能を全開し真のアジア理解を

アジア地域研究科

委員長 高桑 守

大東文化大学大学院アジア地域研究科は、国際関係学部を基礎として、1999年4月に産声をあげた。2001年4月からは、博士後期課程も創設され、本年（2003年）はその完成年度を迎えたことになる。前期課程12名（収容人数24名）、後期課程4名（収容人数12名）の定員でそれぞれ発足して以来、数多い個性豊かな院生諸君がここに結集し現在にいたっている。そして、アジアという無限の世界に、立場こそ違え熱心かつ真摯に取り組んできている。政治、経済、社会、歴史、思想・宗教、生活文化をそれぞれ専門とする教員の指導の下で、いわば二人三脚の体で、修了後、社会に貢献できる、あるいは自立した研究者をめざして日夜研鑽に励んでいる。その結果がこの『大東アジア学論集』に結実している。

私は、常日頃、院生諸君に向って、「自身の眼の高さで対象を見ること。相手の息吹が伝わってくるような、実感のもてる研究をすること」を要請している。本研究科のような社会科学・人文科学を旨とする分野では、社会、思想・宗教、生活文化はもとより政治であれ経済であれ人間の営みを基礎とする限り対象への理解を深めるためには、まず、そこに住む人々をじっくり観察し理解することから、はじめねばならない。対象に対する暖かい愛情と、それを客体化する冷静な判断力、批判力を合わせ持つことで、はじめて研究が可能となる。そのためには、これらを包摂するしたたかな研究主体の確立がなければならない。各分野における先行研究をしっかりと見極めることによって構築できる方法論の模索と共に、できる限り現場に出むき、自らの五感を通して人々の暮らしの実態を把握することが必要となる。自身と対象とのキャッチボールを繰り返えしながら研究の深化を計る。

アジアで現在、生起している諸事象を真に理解していくには、この手続きが必要となってくる。幸い、本研究科ではフィールドワークを奨励する奨学金が交付され、毎年これによってアジア各地に出かける院生も増えてきた。彼らもたらす現場の息吹を、院生諸君は共有し、自らの糧とすべきである。

わがアジア地域研究科の特徴を、あえて主張するならば、アジアを頭でのみ理解するのではなく自らの身体や五感を駆使して、全人間的に、これに取り組むところにあるといえる。ある人は、泥くさいというかも知れない。あるいは肉体派などと侮る者もいるかもしれない。しかし、それはそれでよいではないか。拙速をさげ、したたかにアジアのあらゆる現場でそこに住む人々に暖かいまなざしを向けつつ活躍できる若い人材の輩出を期待しよう。身体 of あらゆる機能を全開して新しい学問の再構築に一丸となって取り組んでいこうではないか。本論集は、このような行動の第一歩でもある。研究者としてみた時、まだまだ未熟な面が目立つが、これを実りあるものにしていくためにも読者諸賢の忌憚ないご叱正、ご批判をお願いしたい。